

柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

第 55 号

平成29年7月20日
(川瀬祭)



たまたまたに

所はなれ来て

間近くも

見れば巖し也

秩父群山

古典に学ぶ「祭祀」の心得

鎌倉時代に登場する伊勢神道の教典ともいふべき神道五部書のひとつ、『造伊勢二所太神宮宝基本記』には、

神宮の教説を代表する託宣「神垂ハ祈禱ヲ以テ先トシ、冥加ハ正直ヲ以テ本トス」をかかげて次のような祭祀の心得を記している。

神ヲ祭ルノ禮ハ、清浄ヲ以テ先ト為シ、真信ヲ以テ宗ト為ス。散齋、致齋ノ潔齋日ハ、喪ヲ弔セズ、病ヲ問ハズ、宍ヲ食サズ、刑殺ヲ判ゼズ、罪人ヲ決罰セズ、音楽ヲ作サズ、穢悪ノ事ニ預ラズ、ソノ正ヲ散失セズシテ、ソノ精明ノ徳ヲ致シ、左ノ物ハ右ニ移サズ、兵戈ハ用キルコトナク、鞞ノ音ヲ聞カズ、口ニ穢悪ヲ言ハズ、目ニ不浄ヲ見ズシテ、鎮カニ謹慎ノ誠ヲ専ラニシ、宜シク如在ノ禮ヲ致スベシ。(原漢文)

(神道大系・論説篇『伊勢神道(中)』所収「寶基本紀磯浪草」)

「神垂」とは神の慈悲であり、「冥加」とは幽徳すなわち神秘的な神の加護をいう。

「祈禱」とは、この託宣が垂仁天皇の新嘗祭の夜にご祭神の天照皇大神より賜わったことを思えば、広く神祭をさすといふべきである。そのことを思えば、「正直」とは、正しく素直に古式に則り「如在」すなわち神の現在、まさにミアレ(顕現)して在わすがごとく誠実に尽くすことに他ならない。

このことは、鎌倉幕府が御家人や地頭に発令した『御成敗式目』にも「神ハ人ノ敬ニ依リテ威ヲ増シ、人ハ神ノ徳ニ依リテ運ヲ添フ」とあって、「如在ノ禮典怠ルコト無カレ」と結んでいることにも符合することである。

解説 秩父神社 (54)

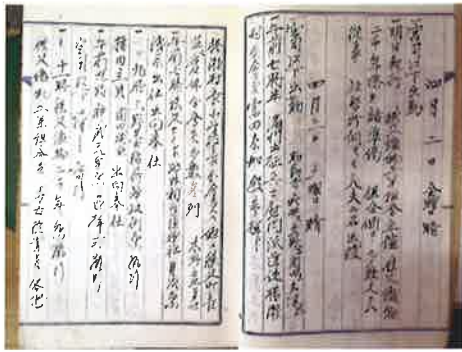
甲 田 豊 治

◆ 秩父絹文化を今に伝えるもの

今から八十年前の昭和十二年の「日誌」(秩父神社の記録)に、秩父の絹文化を知る貴重な記事を見つけたことができた。

○ 四月三日「秩父織物二千年祭」斎行。秩父織物工業組合員、各地のデパートや織元代表、来賓多数として約五千餘の関係者が集ったと記されている。

○ 六月二十四日「石玉垣竣工奉告祭」執行。寄付者・世話人・工事関係者・秩父町長・秩父織物工業組合理事長が参列し、石玉垣除幕式が



昭和12年4月3日の秩父神社日誌

行われ、その後、社殿にて奉告祭が斎行された。

この石玉垣の寄付者には、板垣清平(群馬県伊勢崎にて製糸業を興し、群馬県内における絹文化を担った人物)をはじめ、鐘淵紡績(株)新町工場・東洋紡績(株)・日東紡績(株)・上毛燃糸(株)・帝国人造絹絲(株)などの大手企業名が挙げられ、当時の秩父がいかに織物工業において、重要且つ繁栄していたかを意味するものである。

更に、時代を遡り今から一二三年前の明治二十七年、当時の「秩父絹」の状況を知る貴重な資料が残っている。それが手水舎「漱盥器」である。

この「漱盥器」には寄進者名が兼ね備えており、明治時代の上武地方を代表する絹商人等の名前が挙げられている。

○ 「横浜 原善三郎」は神川町の出身で、生糸貿易で財を築いた明治時代の豪商。横浜の三溪園に縁深い人物である。

○ 「前橋 下村善太郎」は八王子で生糸商を起こし成功。後に前橋発展に尽力し初代前橋市長となった人物である。

○ 「児玉 倉林太郎兵衛」は児玉郡金屋村の鋳物師屋で、「漱盥器」を铸造した人物である。この倉林家と秩父市中町にあった片山金物が取引を行っていた記録が児玉町史民俗編に図説で掲載してある。



明治27年完成時は「大宮組行商仲間」の鉄柵が設置されていた。

この他、明治五年に渋沢栄一の指導により、島村勸業会社を設立し、イタリア・ミラノに自ら赴き蚕種の直販を行った「島村 田島武平」など生糸商に関わる人々、そして、柿原萬藏・大森喜右衛門・矢尾利兵衛など秩父を代表する商人、更に多くの氏子崇敬者の名前が挙げられ、その数一五五名が記されている。

また、「漱盥器」の発起人である上州前橋市の内山長八氏は、明治三十一年に発行された「前橋案内」(野條愛助編纂)によると、前橋市桑町に生糸商としてその名前が掲載されていた。その四年後の明治三十五年発行の「埼玉縣營業便覧」によれば、大宮町(秩父) 仲町にその名前が掲載されており、前橋と秩父との間に

は絹商いのネットワークがあったことが確認できた。

以上のように、明治時代は生糸商人が中心となって手水舎「漱盥器」を遣し、そして昭和初期には国策であった生糸を輸出する企業(製糸工業)が中心となって「石玉垣」を遣してくれた。

今、境内の風景に自然と存在している様に思えるが、その歴史を紐解いてゆくと「秩父」と「絹」との関わり方の深さを再確認するとともに、この二つの存在は、近代の秩父における「絹文化遺産」であり、「秩父絹」の歴史そのものなのである。



秩父絹資料 右から「埼玉縣營業便覧」明治35年・「秩父案内」明治43年・「秩父案内記」大正14年

神まつる精神

宮司 蘭 田 稔

一 神々と祭り

およそ我が国古来の宗教文化には、あらゆる物象に靈性の宿りと働きを感じ得る日本人の神聖感覚が生きつづけています。その靈体をタマと云い、その靈力をタマシヒと表して森羅万象にも、人間と等しく目に見えぬ生命の靈的な働きを直感してきました。

こうした靈的世界のうち、とりわけ異常な靈力をもって人びとに畏怖を感じしめる靈性をカミ（神靈）という。カミは、語源上クマ（隈、クム（隠む・籠む））に由来し、水上・川上・海上のカミすなわち本源の意味にも通じて、隠れた本源の神靈をいうのです。

善きにつけ悪しきにつけ靈威を示すカミを和み鎮める人びとの営みがマツリです。そしてマツリは、隠れたカミのミアレ（顕現）を待ち迎え（籠もりの神事）、精一杯の歓待をして（神賑わいの祭り）カミを鎮送するのです。

特定の靈性をカミと認めることは、すなわちマツリすることです。隠れた靈性をカミと認めるとは、マツリをもってカミの臨在と靈威とに浴することだからです。いわば、靈性がカミなればこそマツリを要し、マツリすればこそ靈性はカミたり得るのです。

要するに、日本の「神々」と「祭り」の営みとは不即不離の相関関係にあるのです。



茅の輪神事」

二 ケ・ケガレと晴れの祭り

さて隠れたカミが首尾よくミアレ（御生れ・御現れ）し給うに当たっては、祭りする人びとも祭りの場も徹底して聖別されねばなりません。神は、不浄を忌み清浄を好み給うからです。そして不浄とはひと口にケガレた状態、清浄とはケガレなき状態なのです。

ところが神事に当たっての不浄は、単に死の穢れ、血の穢れのみならず諸々の罪も一切の悪業や過失、災害や異変などをも含んで、人々の生命や社会の秩序を危機に落としめかねない不祥事をはらんでいきます。反対に清浄もまた、積極的に罪穢れを清めるばかりでなく、神靈を宿すばかりの生命力あふれる状態をもめざす勢いのものであります。日本の習俗では、祭礼の日時と場所をハレ（晴れ）と称して特別な機会とみなすのです。ハレとは、日常の状態を示すケ（藝）と対照する非日常の特別な事態をさし、晴れの日、晴れの場では改まった晴れ着で晴れの所作をして晴れの膳を囲む。

習俗語彙からすれば、ケは生活の日常性や日常態をさして、その公的で非日常態であるハレに対応する。晴れ着に対して藝着（ケギ）といえは、日常生活の普段着をさし、ケシネ（藝稲）とは日常の雑穀まじりの主食をいう。ケツケとかケウエとは稲を植えること、ケガリとは稲を刈り取ることというように、稲作社会の日常性は、このようなケの作物を育て結実させる靈力に支えられていると考えたのです。

この靈力たるケが衰えると田畑の生産力は減退し、日常生活の継続が危なくなるから、このケ枯れた事態を強く意識し、ケの活力を復活するためにハレの祭りが営まれるのです。

かくして日常的にも、ケ（藝）なる状態の無事を願って異常の罪穢れを忌む（忌避する）という慎みの節度が成り立つことはいうまでもないが、祭りに当たっては、俗なる生活が強くケ枯れと意識されるからこそ、特に俗の生活をも忌んで忌み籠もり、心身の俗性をケガレと

して積極的に祓い清める(齋戒)過程が忌み籠もりの神事に不可欠となるのです。

三 外清浄と内清浄と

祭礼一般はともかく神事にたずさわる神職や神役は、穢れは穢れとして祭祀に忌み、清浄を保つことは当然のことながら、現実には世事が多様化し、罪穢れを免れがたいこともあって、個々具体的な「外清浄」よりも心の内面的な「内清浄」を重んじることにもなる。



夏越の大祓

吉田神道の六根清浄祓にみる「目に諸の不浄を見て、心に諸の不浄を見ず」という論理、三社託宣のいう「重服深厚たりと雖も、慈悲の室に赴くべし」といった清浄の内面化も中世以来現代にいたるまでの一貫した趨勢でもあります。けれども仏教という浄穢不二の達観はそれとして、神道の抛るべきは、その霊的生命観に基づいて忌避すべき不浄への緊張は内外ともに尊重して然るべきであります。

【表紙絵解説】



この度の表紙絵画は、市内上町にお住いの秩父農工科学高校二年、笠原玲音君が平成二十七年第四十五回武甲山図画展において、埼玉県知事賞を受賞した秩父第二中学校三年生の作品を掲載させて頂きました。

近年、横瀬町の観光名所としても注目されています。寺坂の柵田ですが、いつの時代もどんな世代の日本人の感性にも穏やかな気持ちを感じ起こさせてくれます。そんな柵田と武甲山の緑のコントラストが鮮明に描かれています。笠原君はここからの風景が大好きだと話してくれました。今は将来の夢に向かい、勉学に一生懸命励んでいる笠原君。今後益々のご活躍を期待しております。

【表紙歌解説】

たまたまに 町はなれ来て 間近くも
見れば厳しや 秩父群山

この歌は空穂の第十歌集『鏡葉』に収録されている歌である。ちなみに

空穂は「鏡葉」というのは古語で、鏡の如き葉といふことである。鏡をたふとんだ頃、椿、櫻などの葉をさういつたものと見える」と記しているが、

「武蔵狭山」という表題の最初の作品で、町とは空穂の住む東京雑司ヶ谷町を指すと思われる、そこから電車であつて狭山で下車し、秩父連山を望んだときの歌である。「厳し」も古語で、秩父の山々の竹まゝ、神秘的な力強さから、神が御座す山としての靈気を感じ取つたように思われる。結句の調べが何とも重厚であり、この歌に精氣を与えている。

窪田空穂(くぼた うつぼ) 本名、窪田通治(くぼた つうじ) 明治十年六月、長野県に生まれる。東京専門学校(現・早稲田大学)文学科卒業後、「明星」に参加し与謝野鉄幹の知遇を得る。三十八年に詩歌集「まひる野」を刊行。その後国文学への関心を深め、文芸誌「国民文学」を創刊。更に、短歌誌「榎の木」「まひる野」を創刊する。満九十歳で他界するまでに上梓した歌集は二十三冊。他に『万葉集評釈』『新古今和歌集評釈』他多くの古典研究書を上梓している。

空穂は大正十四年、昭和六年、昭和三十四年の三回秩父を訪ねているが、特に昭和六年に来秩したときは長歌五首を生み出している。

【響】 主宰 埼玉県歌人会理事 綾部光芳記

秩父宮会報告

◆ 秩父宮会事業報告

権彌宜 新井君美



秩父市役所本庁舎並びに秩父宮記念市民会館の竣工を記念して本会より寄贈致しました「秩父宮両殿下御肖像プレート」が、市民会館のエントランスホール二階に掲げられておりますので、ご来館の折には是非ご覧下さい。

秩父宮家は、大正天皇様の第二皇子である淳宮雅仁親王殿下が成年に達せられた大正十一年六月二十五日に御創建された宮家であり、当地の地名に由来する宮号であります。昭和天皇様の直宮として御活躍されたほか、スポーツ振興にも御尽力なされ「スポーツの宮様」として広く国民に慕われました。

秩父宮妃勢津子殿下には、国際親善やスポーツ・学術振興などの分野で広く御活躍され、特に結婚予防会総裁として結婚予防活動にも取り組まれました。戦後にあつては、疲弊する秩父郡市内をご視察され、旧市民会館や秩父まつり会館の竣工式にもご臨席戴いたほか、霧藻ヶ峰（標高一五二三m）の秩父宮殿下記念レリーフが竣工した折には、御自ら現地までお登りになられています。

今回、本会より寄贈致しましたプレートのお姿は、昭和三年九月二十八日の御成婚の際に撮影した御写真が基になっており、宮内庁三の丸尚蔵館の協力により、銅板エッチング作品として完成致しました。

三月二十六日の竣工式には、秩父宮妃殿下の甥御様にあたる松平恒忠様・寿美枝様ご夫妻をはじめ、秩父宮家の宮務官として永くお仕えされた山口峯生様・ふみ様ご夫妻を来賓としてお迎えし、菌田稔会長と共に除幕式に参加し、久喜邦康秩父市長様より謝辞を頂戴致しました。

顧みますと、本事業は震災の影響により市民会館の建て替えが決定した際、井上久前会長（故人）の発議を受けて「秩父宮記念」の称号を後世に残したいという本会の総会決議に基づくものであり、実に百三十五名の会員有志の皆様より御浄財を頂戴して実現の運びとなりました。茲にあらためて厚く御礼を申し上げます。

本プレートが秩父宮家と秩父地域との深い御縁を後世に伝えるモノユメントとして、多くの皆様にも末永く愛されまことを期待しております。

◆ 秩父宮会研修報告

権彌宜 伏見博樹

秩父宮雅仁親王殿下が長く静養生活を送り、富士山をご覧になることを日課とされていた静岡県御殿場の地。お住まいになられていた御別邸は、秩父宮妃殿下のご遺言により御殿場市に下賜され、平成十五年に秩父宮記念公園として開園。当会でも一度訪れた場所ではありますが、昨年八月に、秩父宮両殿下のお使いになられた防空壕の一般公開が開始されたこの機会に、あらためて「秩父宮様ゆかりの地」に赴き、さらには霊峰富士の麓に息づく富士山信仰の世界観にふれるべく本研修旅行に同行させていただきました。

先ず訪れたのは相模國一之宮の寒川神社。境内の西を流れる相模川の源流は富士山を水源とする山中湖。今回の目的地との予想外な御縁に一同驚嘆致



しました。車窓から湘南旅情を感じつつ、箱根の山を越え秩父宮記念公園へ。秩父宮殿下が好まれた端麗な富士山の姿は、梅雨入り間近の厚い雲に覆われておりましたが、防空壕をはじめ、当時のままの形で保存された園内各所を職員の方にご案内いただき、勢津子妃殿下が回想記『銀のボンボンエール』に綴られた御殿場での両殿下の御姿が偲ばれました。

続いて富士山の麓、吉田口登山道の起点でもある北口本宮富士浅間神社を参拝。杉檜の大樹が幽寂な社を成す境内の参道には昔むした石灯笼が立ち並び、国の重要文化財にも指定される荘厳な御社殿の佇みに、かつて「富士講」「御師」と密接に繋がりがながら北麓に栄えた信仰の豊かさを窺い知ることができました。

翌日は富士山レジャードーム館、ふじさんミュージアム、御師外川家住宅を巡るなか、近世の賑わいから変貌を遂げた今日においても、平安で平等な世を霊峰富士に託した祖先の想いが伝わる研修旅行となりました。
(平成二十九年六月六日〜七日)

※ 秩父宮殿下の肉声が放送されます。

- NHKラジオ第二放送
- 「カルチャーラジオ」
- 声でつづる昭和人物史
- 第一回 九月 四日(月)
- 第二回 九月 十一日(月)
- 午後八時三十分〜午後九時
- 午後八時三十分〜午後九時
- 再放送は翌週月曜日
- 午前十時〜午前十時三十分

◆ 松本眞一 大総代ご逝去



六月十八日享年八十五歳をもって松本眞一大総代がご逝去されました。

松本様は、昭和七年のお生まれ宇都宮大学農学部林学科を卒業後は埼玉県農林部に籍を置かれ、県内広域の林務関係に尽力されました。当秩父に於いては農林振興センター林業業務部長等を歴任され地域の林業発展のために貢献されました。

昭和六十一年、先代のご他界の後に公職を退かれ、松本家の御当主として家業に専念されました。上町会連合会長を始め町会の要職を歴任の後、昭和六十二年より当社大総代にご就任頂き、平成の御大典記念事業を始め数々の御奉賛を頂いております。

また当社の兼務社である秋葉神社に於いても奉賛会長をお務め頂き、神徳宣揚・発展維持に寄与されました。例如上町講社の講元も務められ、更には大祭を始め年間の祭典・諸行事にご参列を賜り氏子崇敬者の範を示されました。永年に亘るご奉仕に對しまして厚く御礼申し上げますと共に謹みて御冥福をお祈り申し上げます。

梶だより



◆ 齋藤大総代神社本庁 設立七〇周年記念表彰



昨年、神社本庁は設立七〇周年を迎え、当社大総代齋藤楓男様が「神社の総代又は責任役員にして功労顕著な者」として記念表彰を受賞されました。齋藤様は平成十六年より大総代に就任し当社の護持運営にご尽力頂いております。

◆ 鎮座二一〇〇年 奉祝者御芳名簿(4)

- 平成二十八年十一月、二十九年六月迄
神社扱い
十五万円 引間 新一
十二万円 竹内美美子
十一万円 小澤 國芳・宮前 亮
高橋 貞男
十万円 高安 智・宮前 浩太
井上 大地
三万円 金子徳吉・梅花
二万円 千勝神社 宮司 千勝良朗
一万円 松永 弘・横田 大助
田島 嘉子・木村 修
五千円 横田彩之助・横田いずみ

上宮地地区

- 十万円 黒澤 恵司
七万円 長島 和夫・深田 稔
柳田地区
六万円 浅見 佳久

◆ お詫びと訂正

前回配布致しました御奉賛名簿に誤りがございましたので、ここに訂正させて頂きお詫びを申し上げます。下寺尾地区

◆ 秩父神社妙見講

- 自 平成二十九年 二月
至 平成二十九年 六月
二月十八日 坂戸妙見講
小川直志講元外二十六名
四月十五日 宮側講
鈴木建志講元外五十五名
四月二十一日 皆野妙見講
宮前喜久江講元外百九十七名
五月 七日 原谷講
中西貞夫講元外四百八十八名
五月十四日 近戸講
柴岡祐雄講元外 百六名
五月二十日 中宮地講
大野昭二講元外百八十九名
六月三日 下宮地講
若林久義講元外六十五名
六月三日 別所講
富田悦之講元外八十二名
六月十一日 熊木講
辻 正講元外百六十八名
六月十二日 幸手妙見講
高浜彰男講元外五十一名

◆ 柞乃杜神前結婚式報告

- 秩父市別所 秩父市別所 深田和宏・理紗様
小鹿野町河原沢 北 大志・恵美様
秩父市上野町 浅見雅宏・光様
さいたま市北区 高橋純也・真李亜様
越谷市大沢 倉林賢輔・真美様
朝霞市本町 マアインティーン・澄様
所沢市山口 森野晃央・由希様
横瀬町横瀬 吉田駿愛・薫様
秩父市本町 吉田翔平・実夏様
児玉郡上里町 廣瀬祐也・さおり様
所沢市山口 出浦研造・直子様
入間市豊岡 長谷部淳・由香里様
狭山市東三ツ木 瀧花宏一・弥生様
比企郡吉見町 中山祥太・恵理様
未永く幸せな家庭をお築き戴きますようお祈り致します。

◆ 職員辞令

- 権禰宜 甲田豊治 願いにより職を免す
(三月三十一日付)
茂木一姫 主典を命ず
宮田和裕 実習生を命ず
(四月一日付)

六月十七日 日野田講
宮城敬三 副講元外百六十二名
六月十七日 本町講
稲葉富司 講元外百十五名
六月二十五日 下郷講
浅見佳久 講元外三百七十七名
本年より、下宮地講若林久義様が新に講元に就任されました。どうぞ宜しくお願い致します。

◆ 氏子青年会武甲山登拝



五月二十八日(即)当社氏子青年会恒例行事の「親子で登る武甲山登拝」を井深会長を始め五十二名の参加のもと開催致しました。

当日は時より晴れ間が覗く天候の中、秩父神社参拝の後、横瀬町生川の武甲山登山口広場から、動植物を散策しながらゆつくりと登り始めました。約二時間後、参加者全員無事に登頂し、山頂の御嶽神社にお参りをしました。親子の絆も深まり、思い出に残る登拝となりました。来年も大勢のご参加をお待ちしております。



◆ 退職のご挨拶



前権禰宜 甲田豊治

「チチブ」の語源と云われるものの中に、アイヌ語で「チチエツプ」と言う言葉があります。これは、「私たち人間が、生きるために必要なものが得られるところ。」と言う意味があるそうです。

卒業論文で「東国地方における星の信仰(妙見信仰)」と題し妙見様の御縁を戴き、平成六年より二十三年間この「知知夫」の総社秩父神社(大宮妙見宮)に奉職させて頂きました。

振り返りますと「平成御大典奉祝事業」や「御鎮座二千年奉祝行事」等の記念行事を経験させて頂いたことや、平成八年より社報「柞乃杜」の編集に携わり、宮司様、前権宮司浅見様、職員の皆様、氏子崇敬者の方々の御指導、御協力により二十年以上に亘る神社の記録に従事させて頂いたことは人生の中で何物にも代え難い財産であります。

この貴重な経験を活かし、四月より東松山市に鎮座致します箭弓稲荷神社に転任となり、新たな気持ちで大神様にお仕えしております。今まで大変お世話になりました。うございませう。

◆ 新人紹介



主典 茂木一姫

昭和63年1月5日生。秩父市上町出身。國學院大學神道文化学部卒。

この度、四月一日付をもって秩父神社主典を拝命致しました。平成二十二年より皆野町三沢に鎮座します瑞穂神社、宮下照之宮司様の下で権禰宜として奉仕しておりますが、多くの方々のご配慮により、兼ねて秩父神社にも奉職させて頂いたたく事となりました。

また、女性神職で珍しいと思われませんが、少しでも多くの方々に女性神職を知っていただくきっかけとなるように、そして女性ならではの視点と心構えで日々精進して神明奉仕に励んでいく所存でございます。皆様方の御指導御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



実習生 宮田和裕

平成6年10月5日生。福島県二本松市出身。國學院大學神道文化学部卒。

学と同時に、東京都文京区に鎮座いたします元准勅祭社根津神社に四年間実習生としてご奉仕して居りました。今回、御縁がありまして四月一日付をもって秩父神社実習生を拝命致しました。神職としての生活がスタートを切りまし

編集後記

だが、右も左も分からない地域で色々戸惑いもありますが、一生懸命神明奉仕に励んでまいりますので、皆様宜しくお願い致します。

■ここに社報第五十五号川瀬祭り号をお届けいたします。

■昨年のユネスコ無形文化遺産登録に沸いた秩父では、年間二百〜三百のお祭があるとされていますが、年々伝承が難しいものも出てきたと伝わっています。

■子供達の祭りでもある川瀬祭りも伝統を守りながら齎行致しますので、皆様方のお力添えをお願い申し上げます。

■社報を担当して参りました甲田権禰宜は、この四月より東松山市鎮座箭弓稲荷神社禰宜として転任致しましたが、次回の解説秩父神社に寄稿を予定しておりますので、どうぞご期待ください。

※ 本報の用紙は再生マツト紙を使用しています。



平成二十九年(二〇二七)七月二〇日
編集 秩父神社社務所
〒366-0804 埼玉県秩父市番場町一三
TEL (0494) 2210262
FAX (0494) 2415596
印刷所 有限会社 拡文社印刷所
〒366-0804 秩父市東町二七一八